

啄木全集

第五卷

啄木全集

第五卷

筑摩書房

啄木全集 第五卷 日記 (一)

一九六七年十二月二十五日 初版第一刷発行
一九七四年八月三十日 初版第八刷発行

著 者 石 川 啄 木

発行者 井 上 達 三

発行所

株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京(四)七六五一(代表)
振替 東京 四一一二三
郵便番号 一〇一—九一

本文用紙 三菱製紙
表紙クロス 東洋クロス
印刷 映印刷
製本 矢島製本

(分類) 0392 (製品) 70805 (出版社) 4604

目次

秋詠笛語（明治三十五年）

三

甲辰詩程（明治三十七年）

元

洪民日記（明治三十九年）

六

丁未日誌（明治四十年）

二七

明治四十一年戊申日誌

二八

明治四十一年日誌

二九

解説

小田切秀雄 三〇

解題

岩城之徳 三〇

日
記
(一)

三十五年秋

秋
詠
笛
語

白
蘋

明治三十五年

秋 籥 笛 語

(白蘋日録)

序

運命の神は常に天外より落ち来つて人生の進路を左右す。我もこ度其無辺際の際に乗りて自らが記し行く鋼鉄板上の伝記の道に一展開を示せり。

惟ふに人の人として価あるは其宇宙的存在の価値を自覚するに帰因す。人類天賦の使命はかの諸実在則の範に屈從し又は自ら造れる社会のために左右せらるゝが如き盲目的薄弱の者に非ず。宜しく自己の信念に精進して大宇宙に合体すべく心靈の十全なる発露を遂ぐべき也。運命は蓋し天が与へて以て吾人の精進に資する一活機たるのみ。されば余輩は喜んでその翼に鞭うつて人生の高調に自己の理想郷を建設せんとする者也。

呱呱の声をあげてより十有七年。父母の膝下を辞して杜

陵の空に学ぶこと八星霜。前途未だ漠として浮雲に入る。この秋流転の水流に従つて校を辞し友とわかれ双親とはなれ故山を去り恋ふ子の美しき面影とさへわかれて孤影飄然東都に出づ。嗟乎、何人かよく遊子胸奥の天絃に知音たる者ぞ。

秋籥笛録はこの旅出の日より起したる日誌也

裂かば花に、碎かば琴の夢追ふ子追ふて旅する命の秋よ。

天琴に誰かよき音の幸守らむ秋掩ふ雲にわかれて去ぬる。

明治三十五年秋

白蘋詩堂

装ひては

花の香による

蝶の羽

秋は舂れの

笛によるしき。

笛語

十月卅日

朝。故山は今揺落の秋あはたゞしう枯葉の音に埋もれつゝあり。霜凋の野草を踏み沍瀝の風に咽んで九時故家の閤を出づ。愛妹と双親とに涙なき涙にわかれて老僕元吉は好摩ステーションまで従へたり。

かくて我が進路は開きぬ。かくして我は希望の影を探らむとす。記憶すべき門出よ。雲は高くして巖峯の巔に浮び秋装悲みをこめて故郷の山水歩々にして相へだゝる。あゝこの離別の情、浮雲ねがはくは天日を掩ふ勿れよ。遊子自ら胸をうてば天絃惆悵として腔輿響きかすか也。

南行して盛岡に下車し仁王の僑居に入る。

午後。朱絃藻外を訪ひ阿部兄とも談したり。下の橋写真館にて岡山残紅兄と撮影しそれより共に片袖庵に蒼梧氏を訪ふ「透谷全集」を贈らる。

我が発程の急なるに皆驚く。

夜。阿部小野小沢三兄と共に加賀野に伊東兄を訪ひ別宴

を張る。

青春の望みに憧るゝ者は幸ひなる哉。万づの勇と力皆これより生ず。吟身愁ひを知る者は聖なる哉。紛紜の胸中自ら清高の香あり。あゝ高き者よ、汝の座は天上に設けられ

たり。
昨夜よりのつかれにて杜陵城下の終りの一夜を安らかに温かに眠りぬ。

○ 若き我れにふるべき鞭のつよき神詘れゆくを笛によみすや。

神を仰ぎ道なる花にはぐれきよ何地向きてぞ我れ歩むべき。

十月卅一日

午前。湧くなる我血汐もかくては遂に溢れなん。別れなればの涙にわが恋しの君訪れ玉ひぬ。

まこと今日のみならじ。わかれなればとて永き宇宙の飄泛に永遠を友とすてふ愛の世に何の時か今日のみと云ふことあらむや。二つ並べる小笹舟運命の波にせかれて暫しは分るゝとも又の逢ふ瀬は深き／＼愛の淵の上に波なき安け

さぞ尊からむ。東都の春の樂の音に共に目さめむもこゝ六ヶ月のうち。あゝさらば胸の轟きしづめて殯の身の、世の大波に暫らくはひとり南せんか。

さは云へど胸掩ふ愁ひの聖なるぞ哀しや。うす紫にわが好む装ひしてあたゝかき涙にくれ玉ふ恋の心のたゞずまひ。女神夕に星をうらむもかくやと許り、うつゝな境ひを辿る情を、男なればの我身辛くも涙を噛みぬ。

君よ「今日のみならず」の一言にこもりぬる二人の命ぞ崇く候はずや。骸は百四十里のかなたにへだつとも魂は常に聖なる宮の燭影のゆらぎに相抱かむ。かくて暫しのわれを、天がけらむ理想の日に行くべき路程の駅路とこそ思はめ。

タイムは飛ぶが如くすぎて。涙!!! 涙!!! かへらせ玉ひぬ。

故友阿部春雨氏の遺稿をわが君に托して保存することゝしたり。

午後公園よの字橋側の高橋写真館にて阿部君らとユニオン会五人撮影す。

猪川箕人瀬川藻外細越白蠡小林花郷岡山残紅の諸君来り談夕方に至る。今日は愈々上京の日なり。

五時行李を整へ俵を走せて海沼の伯母や姉等にわかれ停

車場に至れば見送の友人すでにあり。

薄くらき掲燈の下人目をさけ語なくして柱により妹たか子の君の手をとりつゝ車中のわれを見つめ玉ふ面影!!! あゝ如何にあたゝかきみ胸ぞ。たとへ吾を送るに千人の友ありとするも何れかよくこの恋の君の一目送の語なくしてかたる紅涙にしく者あらんや。

五十五分、我はあはたゞしう友と別れの言を交はしぬ。漚笛一声、車は南に向つてなつかしき杜陵の地をはなれぬ。………

夜の空のしめやかなるに想ひの車轟きて窓によれる我胸狂乱の嵐に乱れぬ。

かくて我はわかれたり。故関の秋の風に袂ぬらしつゝ親しき友と、恋しき人と。

かくして我は哀々の夢に目さめぬ。悲しみの袖をあげて襲ひくる「離別」てふ感情はひし／＼と我胸の奥深く征矢射込みたり。二つ三つの停車場すぐるは我のしらぬうつゝのまなりき。黒き夜の幕に包まれたる杜陵城下の燦たる燈火はあゝはや暗に吞まれぬ。

吾は南に、人は北に。車窓によりて甚深なる瞑想に落ちたる吾はひたすらにこのわかれを思ひつゞけぬ。今朝美しき涙の露にうるはしたるそのやさ眉の君、あゝ今又静かな

る新山祠堂の後なる室に泣きてやおはさむ。愛なる永遠の光を讀じてこの悲しきわかれの愁ひうち消さむとすれど、あゝたゞ徒らに胸の威の抑へ難きを泣かしむるのみ。

凜車は絶えず進みぬ。十時には仙台を通過したり。花明の君や如何に、紫琴の君やいかに。誰かよく我がこの愁ひを知る者ぞ。

十一月一日

愁ひの一夜は那須野が原に明けぬ。たゞ見る落秋の装ひ寥々として目もはるに大野の草雲に入るほとりかすかに筑波連山の靄をきて立てる見ゆ。曙の色わづかに東天にほめくと見ればやがて雨そぼ／＼と降り来ぬ。

うつゝなの想ひにのみ百四十里をすぐして午前十時上野駅に下車し雨中の都大路を俤走らせて十一時頃小石川なる細越夏村兄の宿に轡下させぬ。

談つきずして夜遅くまで眠らず。出郷第一夜の夢はこゝに結びたり。

○

旅は君、胸の若きにふさはずよ乱れて雲の北にとき夢。市に入りて名なきすぐせをはづべしや花の高きぞ風つよき者。

霜寒の筆の趣き市にたへずねがはく袖の詩の花たびね。さらば君さらば劍の轡をしもこゝなる市の人にさぐれとか。

地に咲かん花の命にうらぶれて市の夕の塵を辿る子。めざす方におごりあるべき世と思ひ愛の帆章追ふて漕ぐ海。

杉にこもる祠夕べにそぼつ雨ぬるゝ袂に相よりし欄。

十一月二日 雨、

午前夏村兄と共に秋の歌つくらむとてならず

細越白蠡君の文杜陵より来る。あゝ吾友よ。親しむべきは其あたゝかき胸のうちに在る哉。我は謝す。！

午後夏村兄と共に散歩す。小石川の地高燥にして繁ならず。友は秋の季に最も適せりとて称する事甚だし。小日向台に上る。

今わが腑観する大都よ。汝は果して如何なる活動をかなしつゝあるか。何ぞたゞ魔の如きのみならむや。吾はこの後心とめて汝の内面を窺はんか。

夜。小日向台丁三ノ九三、大館光氏方に移る。室は床の間つきの七疊。南と西に椽あり。眺望大に良し。

夏村兄に伴はれて机、本箱等種々買物す。故家への手紙
認む。

友かへり夜静かにして旅愁あはたゞしう我心を襲ひぬ。
あゝ我は永遠に目覚めたり。

○ 人の胸に人の心臓を掩ひあへで乞ひしは秋の花にちる
夢。

秋の胸の悲しみ細き雨の夕旅はかなげの吾は戸に立つ。
眼とちて立つや地なる骸の世迎る暫しの瞬きよ恋。

小萩咽ぶ雨しめやかに黄昏れぬ愁ひて一人秋をゆく筈。
迷ひては秋の心を風にとひぬ百葉誘ふて何地へにぐる。
岩を踏みて天の装ひ地のひゞき朝の光の陸奥を見る。

(岩手山に登る)

十一月三日 天長節、曇天、

午前、買物、

端書認む(大井、金矢、瀬川、岡山、小林、猪川、上田、
桜羽場、佐藤、片岡、石亀、田鎖、小野寺、高橋、海沼、
田村、堀内、秋浜等の諸氏へ)

鉄幹氏へ上京報知す。

午後。本郷にて露子岩動君に逢ふ。野村琴舟君を(本郷
六丁目二十八月村方)訪ふて逢はず。一人忍ばずの池の畔
より上野公園に上り日本美術展覧会を見る。

陳套なる画題を撰んで活気なき描写をなすは日本画界の
通弊也。こ度の展覧会にて注意すべきは洋画の描写方を日
本画に応用したる作の二三あること也その中にて弁慶の図
など少しく可なり。

画の外あらゆる美術品数千点を陳列したり、それらのう
ち吾目に付きたるは薬師寺行雲氏の石膏彫刻婦人裸体立像
及び(作者忘れたる)銀製の武将乗馬して弓を射る像也。
前者は丈二尺五六寸。美神の如き麗人の少しくうなだれ
て、胸に聖愁をたゝへ恋の星に憧るらむたとしへもなきめ
でたき趣き、崇高なる真白の姿して限りなき景仰に値しぬ。
夜。抱琴原兄、及び金子定一君野村君等へ端書して上京
を報じ山崎へも送る。

出京以来漸く少しく心落ち付きたれば杜陵なるせつ子の
君へ手紙かきぬ

迸しる涙のわりなき秋や、嘗而賜ひし歌の手巾にて溢る
ゝを抑へつゝ記しぬ。あはれ恋しの君わがこの文を読まば
君もや温かき涙にくれ玉ふらむ。

二時就寝。

涙!!!

十一月四日

空地よく晴れ渡りたり。

午前。阿部小野小沢伊東四兄へ長き手紙認めたり。

咏歌。鉄幹氏より来翰。晶子女史御子あげ玉ひし由。

午後。牛込女子大学のあたりまで散歩す。

四時頃より野村堇舟君来り夕飯を共にし九時かへる。

友は云ふ。君は才に走りて真率の風を欠くと。又曰く着実の修養を要すと。

何はともあれ、吾はその友情に感謝す。

細越白蠱君へ端書認む。

○

いざさらば又のあしたの思出に叫ばん者よ詩の黄昏。

花枯れの友の世多き黄昏を天なる蝶の羽ぞ羨みし。

枝にふれて失せぬる風の行方しらに迷ふて落つる袖の

葉か、森。

○

眠る花の風にめざめし瞳上げてふと巨虹の光よぶ朝。

若くして人の世に見る才まねばずかくて胡蝶の羽摧く

夕。

落つる月に秋は希望の袖小さし掩ふては胸の高調に泣

くよ。

市の風に知りぬる秋の暮の色北に愁ひの雲ぞ尊き。

雲をさへ秋の色なる葉の巨樹影は夕日に長うも暮る

ゝ。

朝に夕にゑにしよ淡き川の風逢ふては橋の袂にわかる。

佇みてふと大川にまどひたり舟は秋野の風のせて行く。

落葉ふみて踏みてこゝなる森の路星おごそかに雲井を

洩るゝ。

十一月五日

朝遅く起き急ぎ飯を了へて本郷の自炊に堇舟君を訪ふ。

安村兄工藤兄も在り。

堇舟君と共に神田辺を徒歩し諸所の中学に問ひあはせた

れど何れも五年に欠員なくて入り難し。故に初めの志望通

り斎藤秀三郎氏の正則英語学校の高等受験科に入ることに

思ひ定め規則書在学証書等貰ひ来る。

古本屋多き猿楽丁を通りて又自炊にかへり昼食。閑話し

て五時かへる。

食後夏村兄と日向台の暮色に散歩す。

本日午前金子君来訪せられし由なれど留守にて惜しきこ

としたり。

「校友に与ふる書、落風秋語」かきそめたれど胸何とはし
らず愁へて遂に筆投げぬ。

夜静かにして想ひの羽のみぞ北の空にける。吾は友の
なつかしきをほしと思ひぬ。乙女の美しきを恋しと思ひぬ。
あゝその人今如何に。

○

起てよ友、風の夕の百合折れぬかくてぞ秋は京に入り
ぬる。

愁ひぬれば古き軒端にかへりゆく魂の疾き羽の恋よ百
四十里。

猛くして男の子の道に、脆くして恋の細路に魂迷ふ夕。
雲の乱れ野の嘶ぎにわれさめで、秋風たゞにたてがみ
ながき。

駒やせて野に勇まし秋もなしやみて立つ戸のほころ
びの袖。

すぎし日のすぎし想出さり乍ら我には永劫のうつくし
き鞭。

せめて宵、唄の細音の野にあらば月に羊のめぐきもあ
らば。

西の日の榮に酔ふ子よふりかへれ秋つしま根は大ひな
る虹。

封じ込めてそのさびしさの香に泣きしわれや山茶花京
の秋寒。

碑によりて秋の多まいのさびしさに遠のく雲に光見ぬ
暮。

関を出でゝ望みもありし旅よおろか京の夕は秋にふさ
へる。

袖かみて四年なる血ぞあたゝかき南に北に秋は似たる
よ。

楽の音にさめむ暫しの暗の秋はみ袖の花の京の春待ち。
仰ぐ雲に光まばゆき詩の五洲鞭のそら音にぬる子起さ
む。

星の世の花ぞ降りきて咲くべけれそのほゝあみの曙の
園。

(二首鉄幹氏の下へ御祝)

小さき神の幸のゑにしよ熱かき曙雲のよろこびの影。
想ひかへしました釣舟花の夢に入るよ紅きもありしその
袖の糸。

暮るゝ日を讀じて秋のたなごゝろ合はす暫しにはや血
さびるゝ。

詩の袖に琴の細緒に幸しらず悟りて暗に消えにし友や。
人の世に人の心のあたひしらでさまよひ行きし果の太
洋。

かくてたゞゆきゝする世の波のぬた月落ち行きて星かくろひて。

ふとさめし腫とちてぞ安かりし夢の行方の暗を思ひぬ。
涯もなう流れて水はかへり来ず神に終なる裁判否むよ。
待ちし春、待たるゝ春とめぐる地の年の大波かへる時なく。

暗無限今か終りの一呼吸の胸を覆ふぞと神にすがりし。
陰府の道に一人さめてぞ迎りゆく吾によるべき杖たまへ〜。

小さき神のこの世に生ひし香ぞ高う光あふるゝ曙よ今。

(三首鉄幹氏の下へ祝ひとて)

さめてねて詩にはぐまれん幸の君小さきゑがほぞ永劫に高かれ。

星の世の花の降り来ん園とするそのほゝゑみの盃の色。
碎けてはまたかへしくる大波のゆくらくに胸おどる洋。

(石の巻を懐ふ) 二首

くるゝ雲をはてを何所としらずして洋覆ふ幕に想ひ入りぬる。

濁る波にたゞよひ出でむ想ひぞもうき艸つひに紅ならぬ。

(十首出郷)

関を出でゝ何所としらぬ羽のちから行方なりとて暗指

せし。

行く秋のちる葉憐み留めんとてあはたゞしうも追ふて出る郷。

秋の山のにしききて行く我なれば泣きまさどりしたちねの胸。

踏む路のしもがれ草ぞわれによきかくてかへらむ日の草嫩葉。

虹の輪のたかき仰ぎてかへり見てかざすは秋の詩の袖なりし。

暫しさめて再び入らむ聖き夢ゆめはとこしへ幸あらむ者。

わかれなりとうす紫の袖そめて万代われに望みかけし人。

枯葉見て星を仰ぎて幸の世のみじかゝるべき旅をさぶしむ。

高き世の高きのぞみと思へばのこの旅立に辛かりし涙。
み文みてその夜がたりを思ひ出て思ひかへして涙に朽

(花郷兄へ)

(以上は鉄幹氏に送れり)

十一月六日 全晴

朝。小林花郷君の書状は杜陵より、原抱琴兄の端書は芝より来る。

秋は冷たく光なく白壁を暗にさぐる如きとやあゝわが故郷!!! 健在なれよ友!

午時。「太古の遺民、猪川浩」兄よりは杜陵吟社の諸兄と共に原兄及び余が出京の際撮影せるを、小沢兄よりはユニオン会同人が共に去る卅一日うつしたるを、共に郵送し来る。漸くうすれ行く面影をまた新たにしたる心地して嬉しきこと限りなし。諸友希くは健在なれ、かくて来春の再会をたのしまむ。

一日詠歌にくらす。夜に入りても写真側よりはなし難う覚えぬ。鉄幹氏に送るべき歌稿と手紙認む。

想ひは家郷にあり。

十時ごろ岡山残紅兄のこまかき端書きたる、その歌三首あり曰く

幸ありて見つるきのふや詩のみ園色なき今を何地にきえむ。

み空高う雲をば人の夢のあとゝ夢に相見る秋よ夕戸よ。こゝにしも高きみ花を仰ぐ我秋なほ袖は香ぞ驕りなる。

○

ゆく秋の落葉恋ひてぞ朽つるまゝあはたゞしうも追ひし門出や。

乱れてぞみ胸そめてぞ姪紫苑秋むらさきの濃きめし玉へ。
(せつ子さまへかへし。)

十一月七日、快晴

朝、鉄幹氏への手紙投函す。

神田錦町に金子君を訪ふ、路すがら野村兄に立ちよる。

オ、繁華なる都府よ、人の多くはこの実相の活動に眩惑せられて成心なき一ケの形骸となり了る。吾はこの憐むべき幾多の友を見たり。

悪臭ある風塵を捲いて市街の至る所に吹き廻る、その吹き行く所、吹きつくる所、白粉化せられたる東京てふ骸骨を連ねて榛として時つを見る。人は東京に行けば墮落すと云ふ。然り成心なき徒の飄忽としてこの大都塵頭に立つや、先づ目に入る者は美しき街路、電燈、看板、馬車、艶装せる婦人也、胸に標置する所なき者にしてよく此間に立つて毫末も心を動かさざる者あらんや。あゝ東京は遊ぶにも都合のよき所勉むるにも都合のよき所なり。

然れども吾人の見る所を以てすれば都府には一の重大なる精神あり。その嚮ふ所は本源の活動にありてよく諸地方